

# 第1章 戦場

シベリアでの捕虜生活

## 極寒の地シベリアでのきびしい生活

中鉢 彰さんのお話から

○三里 約十二キロ

○下士官 士官と准士官と兵の間に位する武官。

○対峙 二つの勢力が向き合ったまま動かないでいること。

○機銃掃射 機関銃などを敵をなぎ倒すように射撃すること。

○牡丹江 表紙裏地図

○関東軍 満州に駐屯した日本陸軍部隊。日本の

満州支配の中核的役割を担ったが、昭和二十年（一九四五年）、ソ連参戦によって壊滅した。

○精銳 えりぬかれていてするどいこと。えりぬきの強い者、または兵。

昭和十六年（一九四一年）二月、私は二十二歳で入隊しました。旭川にあった歩兵第二十七連隊に所属し、そこから満州へ渡りました。満州国の東安省密山から三里ばかり離れた駐屯地が私の任地で、目の前はソ連との国境です。そこで、国境警備隊の下士官として、終戦直前のあの日まで、ソ連軍と対峙していました。

昭和二十年八月九日の早朝、突然、ソ連軍が国境を越えて一斉に攻めてきました。窓を見ると、外はもう赤く燃え上がっていました。それは飛行機による爆撃と機銃掃射でした。三日前に、国境まで行ったときには、全くそんな気配は無かったのです。あのような重火器をどうやって隠していたのかまったく分かりません。機関砲でやられると腹わたがバァーッと飛び出します。人々は裸足のまま、我先にと逃げ回りました。まさしく生き地獄そのものでした。

私たちはすぐに司令部に指示を仰ごうとしましたが、全然連絡が取れません。司令部のある牡丹江まで下がってみると、もう誰もいないのです。かつて関東軍は精銳六十万を擁する極東最強の軍隊と言われていました。しかし、南方戦線が不利になるにつれ、兵力のほとんどが南へ送られ、軍隊としての組織力はすでに失われていたのです。指揮系統も何も無く、満州の関東軍はあつて無いに等しいものでした。その中でのソ連軍侵攻でした。誰もが逃避行を余儀なくされました。

大勢で歩くと標的になるので五十〜六十人の小部隊で移動することにしましたが、それでも結局は銃の標的となり散々に逃げ回りました。しかし、私たちのような軍人はまだしも、悲惨

- 逃避行 事情があつて、世間の目を避け、各地を移り歩いたり、人目につかない所に隠れ住んだりすること。
- ソ連 大正十一年（一九二二年）、世界初の社会主義国として成立した連邦国家。平成三年（一九九一年）に連邦が解体し、現在のロシアやウクライナ、カザフスタンなどの国々に別れた。
- 武装解除 捕虜や投降者などから強制的に武器を取り上げること。
- ブラゴエシチェンスク 表紙裏地図
- 抑留 おさえとどめること。強制的にとどめおくこと。

だったのは民間人、特に開拓団の人々でした。開拓団は、国策で山形、東北、仙台、青森、特に北海道から満州全土に呼ばれた人たちで、終戦時には三十万人もいたそうです。その人たちが一斉に南方へと逃げ惑います。子どもや年寄りも一緒になって逃げていきます。母親は両手に子どもの手をとり、さらに一人おぶって、裸足で逃げ回ります。でも、おぶっている子どもはもう死んでいる子もいるのです。そして最後には、手りゆう弾でやられたり、力果てて死んでしまいます。自決する人や子どもを中国人に託して死んでいく人もいました。

一か月に及ぶ逃避行の末、吉林省に着いたところで、私たちが見たのはソ連軍の戦車の跡でした。やはり到底逃げ切れるようなものではないのです。私たちはソ連軍による武装解除を受け、捕虜の身となりました。

一か月ばかり歩かされて牡丹江に着きました。そこではソ連軍が引き揚げた後の後始末をさせられました。ところが、二週間もすると今度は、国境を越えてイマン、ハバロフスクへ、そして行き着いたのは極東第二の都市、ブラゴエシチェンスク。シベリアでの長い抑留生活の始まりでした。その時、私たちの服装は、ズボンの下にはパンツ一枚、上半身はランニングシャツだけ。八月から逃亡し、そのままの格好で捕まっているのです。そして冬を迎えました。零下四十度。石ころだって蹴飛ばしても取れません。そんな地でジープやトラックに乗せられて北へ北へと連れられていきました。もちろん防寒着なんてあたりません。周りの仲間がバタバタと死んでいき



イメージ図

子どもと逃げ回る母親

○伐採 山や森の竹・木など伐りとること。

○黄疸 胆汁色素が血液中や組織内に異常に増加し、皮膚・粘膜その他の組織が黄色になる症状。

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。

ます。朝起きたら隣で死んでいるのです。もう、何人死んだか分かりません。行つた先では、シベリアの家に使う丸太の伐採を一年間させられました。黄疸で仲間が次々と倒れていきます。

二年目からは、さらに北へ四百五十キロのところへ連れて行かれ、鉄道を敷く作業をさせられました。そこは一面の森林です。鉄道が通る道を切り開くために伐採の作業もさせられました。冬は零下五十度になるまで作業は続きます。でも零下四十度だって寒くて、足も上がらないし、まさかりも振れません。重労働と空腹、それでも作業は続きます。仲間が次々と死んでいきます。氣力で生きるほかありません。そしてそのうち誰も何も言わなくなるのです。たまに話をしていても食べ物のことばかり。もう、国に帰るとい意識すらありません。頭がどうかなってしまっているのです。

本当に数え切れないくらい人が死にました。捕虜になつたのは七十万人。このうち二十万から三十万人の人が亡くなつたと言われています。しかし、正確な数は今でもはつきり分かりません。線香も無く、墓標も無く、どこで亡くなつたのかも分からない人が大勢いるのです。

昭和二十三年六月、ようやく帰還命令が出ました。約十日かけて貨車で運ばれ、着いたのがナホトカ。ここで日本へ行く船を待てとのことでした。本当に帰ることができるのか不安が募るばかりでしたが、四日経って、



イメージ図

零下50度の中、重労働と空腹が続いた

○岸壁の母 第二次世界大戦後、ソ連からの帰還を港でひたすら待ち続ける母親をマスコミが取り上げたときの呼び名。

やっと一艘の貨物船が到着。大阪商船第一大拓丸、終戦間に造ったものでした。船尾には日の丸の旗。デッキには白い服を着た看護婦さんが手を振っていました。私たちは泣きました。「日本に帰ることが出来る。」と、みんな感極まり、抱き合って泣きました。

東舞鶴に着き、汽車で北海道に向かいました。一つひとつ駅に停まります。駅では、写真を見せて息子を探す年老いた母親の姿、息子と無事再会し、二人で泣きながら抱き合っている姿をよく見かけたものです。いわゆる「岸壁の母」そのものでした。

私は来年で満九十歳です。そのうち八年間の青春時代を戦争で失いました。そして今でも戦争で罪の無い人がたくさん死んだということは、私の心の中から離れません。

シベリア

シベリア、それは吾々が想像もしない広大な土地、

そして果てしなく続く森林の国でした。

洞周り一米もある太さ、

背丈は三十米白樺のストラツとした大木。

何時果てるとも知らない樅の木。

人間を全く寄せ付けない厳しさ。

鳥も鳴かない静寂そのものの

あの時は己を忘れ靈感を覚えました。

その土地に初めて足を踏み入れたのが、

吾々捕虜の日本人だと後に聞かされました…。

DATA

平成21年度清田区平和事業

聴き取り

- ・平成21年9月29日
- ・清田区役所



中鉢 彰(ちゅうばち・あきら)さん

- ・大正9年(1920年)生まれ
- ・札幌市清田区在住